平成 25 年度　確かな学力の向上に係る実践的調査研究

学力向上実践研究　研究報告書

学校名　御所市立葛城小学校

〇研究テーマ　　自ら学び、互いに伝え合い、受けとめ合える児童の育成

～「単元を貫く言語活動」の充実を目指して～

１．児童の実態と本校のグランドデザイン

平成 25 年３月末に全職員で子どもたちのプラス面とマイナス面を生活・行動面と学習面とに分け、ワークショップ形式で出し合った。葛城っ子の基本課題として、「『話す』力、『伝える』力が弱い。」「言われたことは真面目にするが、主体的な活動ができない。」という意見（図１）が挙げられた。

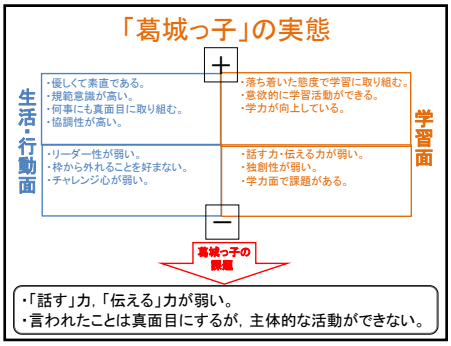

図１　児童の実態

このような子どもたちの実態を受け、本校の教育目標、「チャンス・チャレンジ・チェンジ～伝え合おう　受けとめ合おう」ができる葛城っ子に育てていくことを全員で決めた。

その後、研修部で学力・学習面において、①グループ学習、②思考をゆさぶる発問、③学習効果を上げる校内環境の充実に向けて研修の重点を決めた。これらを一つにまとめたものが、図２のグランドデザインである。

これを基に、平成 25 年度も国語科を中心に研修をしていくことを確認し、国語科の授業改善を進めた。

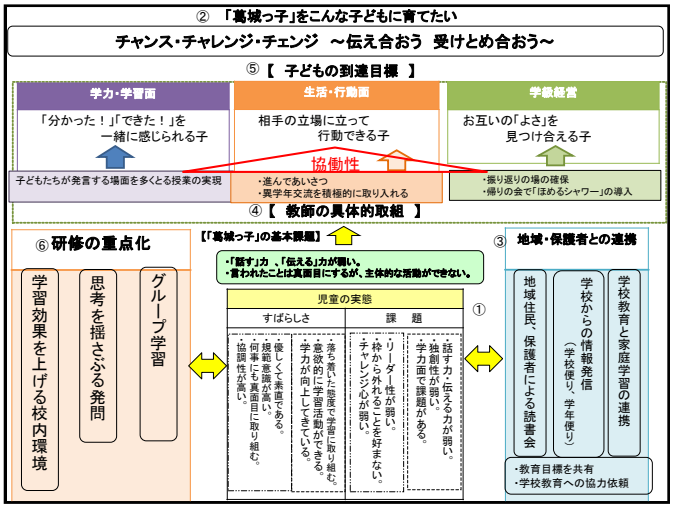

図２　グランドデザイン

２．国語科についての児童の意識調査

（平成 25 年 10 月）

まずは、全校児童の国語科についての意識を把握するために、文科省の全国学力・学習状況調査を参考にして、学校独自にアンケート調査を行った。

①「国語科の勉強は大切である」という問いに対して 100％の児童が「当てはまる」や「どちらかというと当てはまる」という肯定的な回答をした。②「国語科の勉強で学習したことは、将来、社会に出て役立つと思う」という問いに対して 93.2％の児童が肯定的な回答をした。しかし、それにもかかわらず、③「国語の勉強は好きだ」という問いに、「当てはまる」や「どちらかといえば当てはまる」と肯定的な回答をした児童は 67.2％だった。特に気になったのが、高学年の多くの児童が国語科の勉強が好きではないということだった。また、④「読書は好きだ」という問いに対しても、肯定的な回答をした児童は 79.2％だった。ここでも気になったのが高学年の児童の読書離れであった。実際、⑤「普段学校以外でどのくらいの時間読書をしていますか」という問いからは、５、６年生では約３割の児童が読書を普段していないことが明らかになった。また、低学年でも「しない」と回答している児童がいた。

これらの児童の意識調査から、「国語科は大切な教科だと考えながらも、好きでない児童が多くいる」ということが分かり、そのことが「読書活動」につながらない要因になっていることも分かった。

３．本校の国語科の授業改善

国語科の学習において「単元を貫く言語活動」を位置付け、研修を深め言語活動の充実を図った。また、意図的に読書させる時間や場をつくって、読書に興味・関心をもたせるようにした。ただ単に読ませるのではなく、児童が、国語科で学習していることに関する本を手に取り、読むようにすることで国語の授業に対する興味・関心を喚起できるようにした。

この取組が児童の学習意欲の向上や主体的な学びにつながり、読書量を増やすことにもつながった。

４．各学年の具体的実践

(1)　１年生の実践

１年生の授業では「おとうとねずみチロ」を取り上げた。この教材の指導事項が「C 読むこと」(1)のカであるため、「おとうとねずみチロ」のシーンごとに児童の好きなところと、その理由を書くことのできる「おはなしカード」をつくる取組を行った。そして、本単元の学習のまとめとして、児童が書いた「おはなしカード」を隣の校区の名柄小学校に届けた。

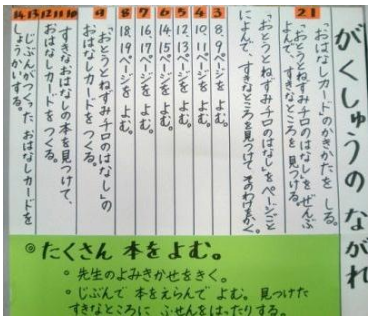

図３　単元の全体計画

児童がこの単元の全体計画（図３）をいつも見られるように、教室横に掲示した。その結果、児童が学習の見通しをもつことができ、学習意欲が高まった。また、学習の流れが児童に分かり、振り返ることができるような学習環境を整えた。その他にも、第二次からは授業の最初の５分間に、担任が読み聞かせをする時間をとったり、授業に関連する本を集めた読書コーナーをつくったりして、児童が本を手に取りやすい環境をつくった。

図４　なるほど！どうぶつひみつクイズ

(2)　２年生の実践

説明文「ビーバーの大工事」で取り上げる指導事項は「C 読むこと」(1)のエであった。このことを確実に指導するために「C 読むこと」(2)のウの言語活動例を受け「なるほど！どうぶつひみつクイズ」（図４）をつくるという言語活動を位置付けた。ここで並行読書させる本として「動物の生態について分かりやすく書かれているもの」を選んだ。

このような取組を通して、本校の教員が「単元を貫く言語活動」の意義について確実に理解を深めることができた。

(3)　３年生の実践

３年生は、説明文「もうどう犬の訓練」の教材で、要約することを重点目標とした実践に取り組んだ。第一次では、「早わかり！はたらく犬ブック」をつくり、それを２年生に紹介するという取組の流れを児童に知らせた。作成に当たり、まず担任が「はたらく犬ブック」を作成し、児童に示し取組への意欲を高めようとした。

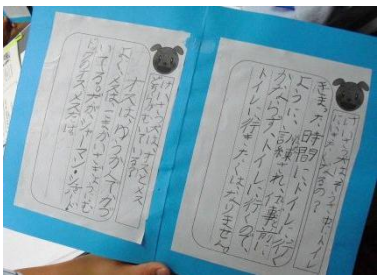

図５　はたらく犬ブック

第二次では、問いについて丸写しをして答えるのではなく、ポイントになる言葉や文章をそのまま使ったり、必要に応じて言葉を付け足したりしながら答えを書かせた。第三次では、並行読書してきた「はたらく犬」の本の中から２年生に紹介したいものを自分で選び、問いをつくらせた。そしてその答えを要約しながら「早わかり！はたらく犬ブック」（図５）にまとめさせた。こうしてでき上がったブックを２年生に紹介した。２年生に紹介するために分かりやすいものをつくろうという目的意識をもって取り組むことで、児童が主体的に学習を進めることができた。

(4)　４年生の実践

４年生は「ごんぎつね」の教材を取り上げた。第一次では、教員がまず巻物を作って児童に示し、同様の巻物を作成して３年生に紹介するという学習の流れを示した。第二次では、場面の移り変わりに沿って登場人物の気持ちの変化をワークシート（図６）にまとめた。第三次では、並行読書してきた本の中から、巻物に表したい物語を選び、登場人物の気持ちの変化を中心にまとめ巻物にした。その後、３年生に紹介した。

図６　ワークシート

この実践を通して、教員が、登場人物の気持ちを叙述を基に想像して読むこと、目的に応じていろいろな本を選んで読むことという指導事項を明確にして指導することの重要性を再確認できた。

(5)　５年生の実践

「世界でいちばんやかましい音」では、第一次で児童に「リーフレットをつくって、４年生に紹介する」と流れを示した。第二次には、人物相互の関係や場面の描写に着目させながら内容をまとめた。第三次には並行読書してきた本から自分の選んだ本を「設定」「展開」「山場」「結末」に分けながらリーフレットにまとめた。そしてそれを４年生に紹介した（図７）。

図７　４年生に紹介

本校のこれまでの国語科の授業では、教師に質問されたことだけを答えるといったものが多かった。しかし今回、リーフレットをつくることで児童が思考力・判断力をはたらかせて、主体的・意欲的に取り組むことができた。

(6)　６年生の実践

「ヒロシマのうた」では児童に付けたい力を明確にし、確実に指導するための言語活動を位置付けた。第二次では、付けたい力に即してリーフレット（図８）に書かせる項目を担任が意図的に設けた。今年度最初の５年生の実践でもリーフレットづくりをしたが、６年生の実践では、ただ単にリーフレットにまとめていくのではなく、「この力を付けたいから、このことを書かせる」という教員の意図が明確なものとなっていた。

図８　リーフレット

このようにして、本校では「単元を貫く言語活動」の在り方についての研修を深め、積み上げることができた。その結果、再び３学期に同じアンケートをとったところ、国語科に関する意識調査で児童に変容が見られた。

５．国語科についての子どもたちの意識の変容（平成 26 年１月）

①「国語科の勉強が好きだ」という質問では、１年生で、「どちらかといえば当てはまる」という児童が減り、その分「当てはまる」と回答した児童が大きく増えた。②４年生では、「当てはまる」の児童が増え、「どちらかといえば当てはまらない」という児童が大きく減った。③５年生では、「当てはまる」と答えた児童が増えた。→全校児童の平均で肯定的な回答をした児童が 11 ポイント増えた。④「普段学校以外でどのくらいの時間読書をしていますか」という質問でも、１年生では「30 分～１時間読書する」という児童が大きく増え、「しない」という児童も減った。⑤２年生では、読書時間が「10 分以下」や「しない」という回答がなくなった。→10 月の結果では全校児童の 38%が「10 分以下」や「しない」と答えていたが、１月では 30%となり８ポイント減少した。（図９、図 10）

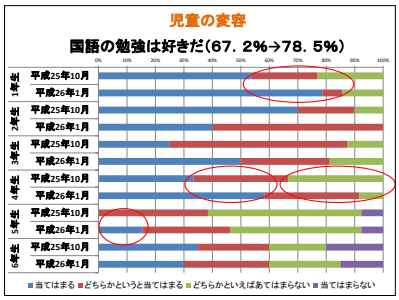

図９　国語の勉強は好きだ

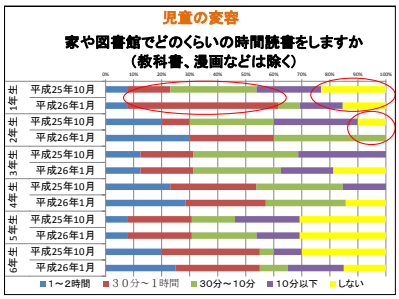

図 10　読書時間の変化

これらのことから、児童は国語科がだんだん好きになり、その結果、本を読む時間も増えてきたということが分かる。

６．平成 25 年度の県の国語科学力診断テスト結果

今年度、11 月に実施した県の学力診断テストの結果、２年生～５年生が県平均を上回っていることが分かる（図 11）。また、３、４年生は県平均よりも 20 ポイント近く上回っている。

図 12 は、３、４年生について県平均正答率との差の推移を表したものである。３年生は、１年、２年時も県平均を上回っていたが、今年度はさらに大きく上回った。また４年生は、１年時から３年時まで県平均を下回っていたが、今年度は 20 ポイントも県平均を上回った。さらに、グラフとしては示していないが、６年生は、昨年度、県平均を９ポイント下回っていたが、今年度は２ポイントの差になり、大きく力を付けたことが分かる。昨年からの推移を見ることのできない１年生を除くと、２年生から６年生のうち３つの学年で上昇が見られた。

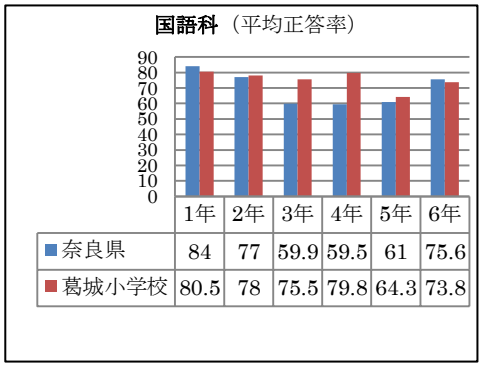

図 11　県国語科学力診断テスト結果

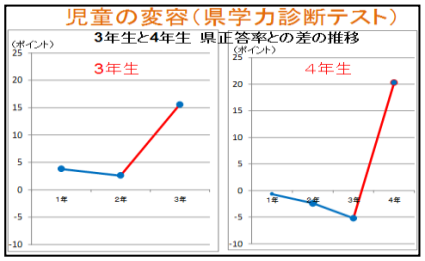

図 12　３、４年生の推移

７．国語科についての教員の意識の変容

国語に対する教員の意識も変わってきた。

平成 25 年４月と平成 26 年１月に、国語科に対する教員の意識調査を実施した。４月には、①国語を教えることは好きではないという教員が 33%いたが、現在では、全ての教員が国語を教えることに肯定的な回答をしている。また、②「単元を貫く言語活動」について理解しているか、という問いに対しては、研修を深める前は 70%の教員が「当てはまらない」と回答していたが、現在では全ての教員が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。（図 13、図 14）

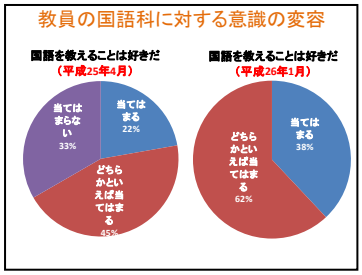

図 13　国語科を教えることは好き

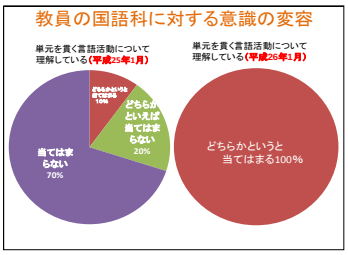

図 14　単元を貫く言語活動について理解している

８．今後の課題

国語科を中心として、さらに充実した言語活動の研究と実践をしていかなければならない。具体的には、まず、今年度の取組を踏まえ、本校の児童にどのような力が必要なのか、また、６年間を通して児童にどのような力を付けていく必要があるのかを見極める必要がある。そして、国語科における各学年の、より具体的な年間指導計画を作成する必要がある。

年間指導計画は、その単元で中心的に指導する指導事項をそれぞれ明確にし、１年間を通してどの指導事項も落とすことのないように配慮して作成しなければならない。また、確実に指導事項を実践していくためにも、指導事項に合う言語活動を明記する必要がある。

また、国語が好きでない児童や、自分から本を手に取り読書しない児童がまだいることも事実であり、今後も学習意欲や読書意欲を高める取組をしていく必要がある。

このような取組、実践を確実に積み上げ、今後さらに発展させていきたい。